

# 子実トウモロコシの 今年度の生産に向けて

— 宮崎・北海道岩見沢で検討会を開催 —

3月3日に宮崎県川南町で、3月5日に北海道岩見沢市で、それぞれ子実トウモロコシの検討会が開催された。これから取り組みたいと考えている農業者にとって重要なのは、国産NON-GMOトウモロコシの価値を共有できる需要者とともに取り組むことである。いずれの検討会にも需要家が参加し、情報交換できる場が設けられた。会の模様を報告する。

1 写真は宮崎サンエフの飼料工場の内部

2009年に始まった日本での子実トウモロコシ生産の取り組みは、今年で7年目のシーズンを迎える。昨年は北海道で100ha以上の栽培面積となり、東北から九州までの府県での取り組みも始まりつつある。先行する北海道での大規模栽培を踏襲することは難しいが、それぞれの地域に見合った機械を用いた栽培体系を確立しようと経験を重ねている。まさに、子実トウモロコシの生産拡大に向けて、挑戦を続けている状況である。

なかでも、収穫コンバインや栽培品種、需要先といった解決していくべき課題が明確になり、協力の輪も広がってきたところだ。特に、需要先の開拓は至上命題である。輸入トウモロコシでも、NON-GMO（非遺伝子組み換え）を選んで購入してきた畜産家の協力が欠かせない。海外のGMトウモロコシとの価格競争に晒されては、国産NON-GMOの価値が活かされないためである。あくまでも、需要と供給が見合っていないので、生産拡大が見込めるはずだ。

今年の取り組みを見据えて、今年3月に宮崎県川南町と北海道岩見沢市の2カ所で、子実トウモロコシ生産に関する検討会が開催された。今回は、その2つの検討会の模様を報告する。

## 子実トウモロコシ生産に関する緊急検討会

(宮崎県川南町)

3月3日、宮崎県川南町のエコフアイドによる飼料工場である(株)宮崎サンエフ(遠藤威宜社長)で子実トウモロコシの生産と供給についての検討会が開催された。宮崎サンエフは川南町の7戸の養豚家により設立した飼料工場で、食品廃棄物と輸入の丸粒NON-GMOトウモロコシを使った自家配合飼料を生産している。構成員である養豚家はその飼料を給餌し、高付加価値の養豚経営を実現している。

国産子実トウモロコシの需要者となる宮崎サンエフの要請を受けて、(株)農業技術通信社とパイオニアハイブレッッドジャパン(株)の呼びかけで検討会が開催された。宮崎県内および九州各地の本誌読者を中心に、行政や試験研究機関および機械メーカー、畜産業者、飼料メーカーなどの関係者も含めて18名が参加した。早場米地帯でもある宮崎では、3月中での播種も可能になることから緊急の開催となった。

検討会で、挨拶に立った遠藤社長は次のように述べた。

「(鹿児島県)志布志港での丸粒トウモロコシの価格は、今年1月には38円/kgを超えました。自社便のト



2 飼料工場の中央にある大きい機械にすべての原料を入れて熱処理した後、乾燥して、ふるいにかける 3 宮崎サンエフの丸粒トウモロコシ輸送用の専用トレーラー。鹿児島県の志布志港と往復する 4 宮崎での検討会の様子 5 飼料配合に精通した遠藤威宣社長 6 原料に使用している飼料用米のサンプル 7 8 9 飼料工場に持ち込まれる食品廃棄物は、賞味期限の切れたお菓子など多様である

トレーラーを使っても、工場までの物流コストは2・5円/kgを超えていきます。これまで輸入のNON・GMOTウモロコシを使っていますが、それが国産ということになれば、さらに我われが生産する豚に付加価値が付きそうです。実験的な段階の今なら、物流費を含めて50円/kgくらいで買うこともできます。皆さんドンドン作ってください」

その後、本誌昆吉則編集長とバイオニアハイブレッドジャパンの白戸洋一氏の状況説明の後に質疑応答が行なわれた。

参加者の多くは、本誌を通じて他の地域での国産子実トウモロコシの生産状況を知っており、生産意欲を示していた。しかし、熊本県八代市や佐賀県の干拓地などからの参加者は、高齢農家が離農すればさらにブロックでの畑地化が進み、子実トウモロコシの生産も容易になるだろうと現状での条件的困難を指摘していた。一方、宮崎市内からの参加者は小規模ながら今年から取り組みたいと積極的な姿勢を見せた。その参加者に同行していた市行政担当者も、今後の飼料米政策の行方に不安も感じており、行政としても取り組み方を検討したいと話していた。

宮崎サンエフの構成員らは、すでにNON・GMOの餌で育てた豚で

あることを謳った、豚肉の商品化に成功している。そのため、輸入トウモロコシの価格が高騰しても、NON・GMOのトウモロコシを選択せざるを得ない状況にある。

同社の輸入トウモロコシの使用量は年間約7000〜8000t。丸粒トウモロコシの輸入にあたり、飼料工場と同じ価格で購入できるように、直接共同購入を始め、専用のトレーラーで陸送している。

とはいえ、回避策として、飼料用米の導入も行なっている。近隣の農家から飼料用米を購入して配合飼料に混ぜているが、丸粒トウモロコシに代わる存在にはなり得ないという。これまでも国内で子実トウモロコシを生産することを模索し、北海道で生産したものを宮崎まで輸送した経験もある。しかし、輸送費が馬鹿にならず、実用には耐えないという結果だった。

そこに、子実トウモロコシの九州での生産の取り組みの話を聞いて、需要家として名乗りを上げたというわけだ。高速道路網の整備が進み、九州地区内からの輸送も便利になってきた。NON・GMOの国産トウモロコシへの期待はそれだけ大きい。宮崎、さらには九州での新たな進展に注目したい。

第18回 子実トウモロコシの今年度の生産に向けて  
—宮崎・北海道岩見沢で検討会を開催—



10 北海道産トウモロコシの需要家である兵庫県の養鶏家、奥野克哉氏 11 岩見沢検討会でのディスカッションのパネラー陣。右から昆吉則本誌編集長、養鶏家の奥野克哉氏、岩見沢市の生産者の滝谷陽一氏と道下一記氏、ホクレンの新發田修治氏と西野一氏、パイオニアハイブレッッドジャパンの小森鏡紀夫氏 12 検討会の会場には130人ほどの関係者が集まった 13 空知地方における子実トウモロコシの展開について説明する、ホクレン農業総合研究所の新發田修治氏 14 子実トウモロコシの栽培技術、品種等について説明するパイオニアハイブレッッドジャパンの小森鏡紀夫氏

子実トウモロコシフォーラム  
2015 in 北海道  
(北海道岩見沢市)

3月5日に北海道岩見沢市で「子実トウモロコシフォーラム2015 in 北海道」が開催され、岩見沢市ならびに周辺地域の農業者や関係機関より約130名が参集した。

すでに昨年、この地域での栽培面積は100haを超え、さらなる生産拡大への需要が高まっている。最初に取り組みを始めた柳原孝二氏の下に子実トウモロコシ生産に関する問い合わせが増えてきたことから、一同に会して、栽培技術にとどまることなく、子実トウモロコシの未来を語り合う場として、企画されたのがこのフォーラムである。初年度から北海道産の子実トウモロコシを受け入れてきた養鶏家の(株)オクノ・代表取締役の奥野克哉氏を招いての開催となった。

開会挨拶として本誌編集長の昆が、これまでの子実トウモロコシの取り組みと現在の動向、これからの展開に期待することを述べた。続いての情報提供は4件。まず、ホクレン農業総合研究所の主任研究員の新發田修治氏が「空知地方における子実トウモロコシの展開」と題して、近年の生産状況を紹介した。引き続き、奥野氏が「鶏卵生産における北

海道産トウモロコシを利用した取り組みについて」、兵庫にある養鶏場の紹介とこれまでの取り組み、需要者側からの要望を伝えた。さらに、ホクレン酪農畜産事業本部・飼料部の西野一課長より、「飼料原料情勢と動産飼料の可能性」をテーマに俯瞰的な視野での説明がなされた。最後に、これから生産に取り組みたいと考えている参加者が最も気になる栽培技術について、パイオニアハイブレッッドジャパンの小森鏡紀夫氏が品種の情報なども交えて解説した。

以上の情報提供を踏まえて、岩見沢市内の農業者、滝谷陽一氏と道下一記氏を加わり、昆編集長の司会進行でディスカッションが行なわれた。

岩見沢の周辺地域では、北海道のなかでも水田地帯での小麦や大豆の転作が広く行なわれている。子実トウモロコシもその輪作体系の作物として組み合わせたという需要がある。トウモロコシの根の伸張により圃場の透排水性の改善に効果が得られることも実証されており、大豆の収量向上への期待感もある。

まず、この地域での国内生産量が増えれば、マーケットがさらに拡大することは間違いない。今年取り組みから目も離せないようだ。